

⑫ 公開特許公報(A)

昭62-39507

⑮ Int.Cl.⁴

識別記号

庁内整理番号

⑬ 公開 昭和62年(1987)2月20日

A 61 K 7/00

7306-4C

審査請求 未請求 発明の数 1 (全4頁)

⑭ 発明の名称 皮膚手入れ用化粧料

⑯ 特 願 昭60-176941

⑰ 出 願 昭60(1985)8月13日

⑱ 発 明 者 小 山 隆 弘 保谷市東町4の7の12

⑲ 出 願 人 ダイセル化学工業株式 堺市鉄砲町1番地
会社

⑳ 代 理 人 弁理士 越 場 隆

明 細 書

1. 発明の名称

皮膚手入れ用化粧料

2. 特許請求の範囲

1) マイクロファイブリル化セルロースと水溶性高分子とを必須に配合することを特徴とする皮膚手入れ用化粧料。

2) クリーム状、乳液状またはゲル状である特許請求の範囲第1項記載の皮膚手入れ用化粧料。

3) 水溶性高分子の一部又は全量にエーテル化度が2.0以上のカルボキシメチルセルロースナトリウムを使用する特許請求の範囲第1項記載の皮膚手入れ用化粧料。

3. 発明の詳細な説明

(産業上の利用分野)

本発明は新規な皮膚手入れ用化粧料に関するものであり、その目的は皮膚の老廃物や汚れとなじみ易く、容易に擦り落とすことができ、しかも皮膚に刺激を与えず、安全性に優

れた皮膚手入れ用化粧料を提供することにある。

(従来技術)

従来、この種の化粧料としては、ピーリング式美肌材(特開昭51-136838、特開昭59-210009)がある。

(発明が解決しようとする問題点)

しかしながら特開昭51-136838号による化粧料は、その特許請求の範囲にも明記されているように、粘液体であり、しかもポリビニルアルコールのような粘着性のある水溶性高分子樹脂を主要成分としているので、皮膚の老廃物や汚れを擦り落とすためには、皮膚に塗布した後、強い力で擦らなければならない、このことが皮膚刺激の原因となり、安全性を損う結果になっていた。

又、特開昭59-210009号による化粧料は上記欠陥はかなり解決されているものの、化粧料の分散安定性が今一歩であり、かつ結晶セルロースの必要使用量が多過ぎてコスト高となることが不可避となる。更にこの化粧料は皮

膚の老廃物や汚れの除去に関しては不充分である。

(発明の目的・構成・効果)

そこで本発明者は、上記欠点を一掃し、実用上極めて優れた皮膚手入れ用化粧料を得るべく鋭意研究を続けた結果、本発明に到達した。

すなわち、本発明はマイクロファイブリル化セルロースと水溶性高分子とを必須に含有することで構成される皮膚手入れ用化粧料であり、その使用法としては、顔面又は身体に塗布後擦り落として使用するものである。

本発明によって得られる皮膚手入れ用化粧料の特徴は、分散安定性が非常に良く、皮膚の老廃物や汚れとなじみ易く、擦り落とすことが容易であり、皮膚の老廃物や汚れを完全に除去してしまい、しかも皮膚に刺激を与えず安全性に優れていることである。又、使用中は、べたつかず、使用後の皮膚には潤いが残るので使用感上においても優れた化粧料である。

本発明で必須成分として配合されるマイクロ

ファイブリル化セルロースは特開昭56-10081号明細書に示された方法によりパルプ繊維をスラリー状で叩解して得られるもので、強力な剪断力を加えることにより、パルプのセルロース繊維の微細構造に変化を与え、微細ファイブリル化したものであって、上記明細書には「微小繊維状セルロース」として定義されている。このマイクロファイブリル化セルロース(以下MFCと略称)の供給形態は0.5~6%程度の水スラリー(ペースト状)又は特開昭59-189141号に示されたMFC濃度約50%の乾燥品がある。その配合量はMFC固形分換算で0.1~5重量%、好ましくは0.5~2.0重量%が良い。

また、もう一種の必須成分として配合される水溶性高分子としては、その種類は限定されないが例えば、カルボキシメチルセルロースナトリウム、アルギン酸ナトリウム、カルボキシビニルポリマー、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルヒドロキシアシルセルロース等が挙げられる。これらは単独で用いてもよく、あるいは複数

で用いてもよく、その使用量は0.05~40重量%、好ましくは0.1~20重量%が良い。

更に水溶性高分子として特にエーテル化度(以下DSと略称)が2.0以上のカルボキシメチルセルロースナトリウム(以下CMCと略称)を選択すれば、なめらかな使い易い展延性が得られ、長期間にわたって分散安定性の良い粘度変化の無い化粧料が得られることが判った。この理由はDS2.0以上のCMCはゲルの無いなめらかな流動性を持つと共に、耐細菌性・耐酵素性・抗酸化性・耐アルカリ性に非常に優れているためと推定される。

なお、本発明の皮膚手入れ用化粧料はクリーム状、乳液状又はゲル状の形態が好ましいが、必須成分であるMFC及び水溶性高分子以外の成分としては通常前記化粧料形態に用いられる原料が必要に応じて配合され得る。

次に本発明について実施例を挙げて説明するが本発明は、これらによって限定されるものではない。

(実施例)

実施例1. 肘・膝手入れ用クリーム

(処方)

(重量%)

(1) MFC(固形分3%水スラリー)	20.0
(2) ヒドロキシエチルセルロース	1.0
(3) 非球状シラス凝集物 (平均粒径 150ミクロン)	0.8
(4) シラスパルーン	1.2
(5) 1,3-ブチレングリコール	7.0
(6) エタノール	8.0
(7) ステアリン酸	0.1
(8) ベヘニルアルコール	0.02
(9) 流動パラフィン	0.04
(10) モノオレイン酸ポリオキシ エチレンソルビタン (20E.O)	0.02
(11) 水酸化ナトリウム	0.02
(12) ベントナイト	4.0
(13) 香料	0.05
(14) 精製水	57.75

100.00

(製法)

- (A) (7)~(10)を加熱溶解する。
- (B) 11および14の各々の一部を取り、加熱溶解したものの中へ(A)を加えて乳化する。
- (C) (B)を冷却し、14の残部に分散する。
- (D) (1)~(6)、11の残部、12、13を混合し、さらに(C)を加えて製品とする。

以上の如くして得られた肘・膝手入れ用クリームは、肘や膝の老廃物や汚れとなじみ易く、容易に擦り落とすことによって老廃物や汚れがきれいに除去され、しかも皮膚に刺激を与えず安全性に優れていた。また、使用中はべたつかず、さっぱりとした使用感であった。

実施例2 マッサージ乳液

(処方)

(重量%)

- | | |
|------------------|------|
| (1) MFC(乾燥粉末品) | 1.0 |
| (2) CMC(DS0.75) | 0.5 |
| (3) プロピレングリコール | 15.0 |
| (4) パラオキシ安息香酸メチル | 0.1 |

また、使用中はべたつかず、さっぱりとした使用感であった。

実施例3 マッサージ乳液

(処方)

実施例2の処方中、成分(2)のCMC(DS0.75)をDS2.5のCMCに変更し、他は全て実施例2と同様にした。

(製法)

実施例2と同様の方法でつくった。

以上の如くして得られたマッサージ乳液は実施例2で得られた乳液の効果に加うるに、使い易い、なめらかな展延性を示し、かつ常温で6ヶ月放置しても分散性・粘度等何の変化も起こさなかった。実施例2の乳液は6ヶ月放置で粘度低下を示し、透明な分離層が生じた。

実施例4 水性ゲル状皮膚手入れ用化粧料

(処方)

(重量%)

- | | |
|---------------------|------|
| (1) MFC(固形分3%水スラリー) | 25.0 |
| (2) カルボキシビニルポリマー | 0.5 |
| (3) プロピレングリコール | 7.0 |

(5) N-ステアロイル-L-グルタミン酸	3.0
(6) セタノール	0.3
(7) スクワラン	0.8
(8) セスキオレイン酸ソルビタン	0.3
(9) 水酸化ナトリウム	0.1
10 香料	0.05
11 精製水	78.85
	100.00

(製法)

- (A) (5)~(8)を加熱溶解する。
- (B) (9)を11の一部へ加えて加熱溶解し、さらに(A)を加えて乳化する。
- (C) (B)を冷却し、11の残部に分散する。
- (D) (1)~(4)および10を混合し、さらに(C)を加えて製品とする。

以上の如くして得られたマッサージ乳液を顔面に塗布してマッサージしたところ、顔面の老廃物や汚れとなじみ易く、容易に擦り落とすことによって老廃物や汚れがきれいに除去され、しかも皮膚に刺激を与えず安全性に優れていた。

(4) グリセリン	3.0
(5) パラオキシ安息香酸メチル	0.1
(6) 水酸化ナトリウム	0.02
(7) 精製水	64.38
	100.00

(製法)

- (A) (2)~(7)を混合して均一とする。
- (B) (A)と(1)を混合して製品とする。

以上の如くして得られた水性ゲル状皮膚手入れ化粧料は皮膚の老廃物や汚れとなじみ易く、容易に擦り落とすことによって老廃物や汚れをきれいに除去することができ、しかも皮膚に刺激を与えず、安全性に優れていた。また使用中は、べたつかず、さっぱりとした使用感であった。

実施例5 水性ゲル状皮膚手入れ用化粧料

(処方)

実施例4の処方中、(1)のMFC25.0%を30.0%に、(2)のカルボキシビニルポリマー0.5%をCMC(DS2.1)1.5%に、(7)の精

製水64.38%を58.38%に変更し、他は全て実施例4と同様にした。

(製法)

実施例4と同様にした。

以上の如くして得られた化粧料は実施例4で得られた化粧料の効果に加うるに、使い易い、なめらかな展延性を示し、かつ常温で6ヶ月放置しても分散性・粘度等何の変化も起こさなかった。

実施例4の化粧料は6ヶ月放置で粘度低下を示し、透明な分離層が生じた。

特許出願人

ダイセル化学工業株式会社

代理人

弁護士 越場 隆